

夢幻のデジタルワールド

1 ジャスティモンは夢を見る

『この町の平和を脅かす者に、私は屈することは無い！』

私を見下ろすメギドラモンに対し、自身を奮い立たせるよう、心に刻んだ言葉を発する。身体に纏うアーマーはボロボロで立ち上がるのが精一杯、本音は今すぐにも逃げ出したい。

しかし、後ろには大事な町が、友人たちが、まだ戦う術のない幼年期デジモン達が居るのだ。

ここで諦めてしまえば、彼らはどうなる！

『力無き言葉に何の意味も無い！これで終わりだあ！』

メギドラモンから溢れ出る程のエネルギーが口内に収束していく…あれを防ぐことが出来なければ私もとも街が破壊されるだろう…。

『メギドフレイム！』

あらゆる全ての物体が灰塵に帰す、メギドラモンの必殺技。避けることは出来ない。

防御したところで現状のダメージでは防ぎ切ることが出来ない。となれば、やることは一つ！

『体はどうなってもいい…この一瞬だけ…全てを…この一撃にかけるっ！』

己の命を力に変え、走り、飛び上がる。

『ジャステイスウウウツッ！ キイイイイイイイツクツツツ！』

私の右足に全てを賭ける！
これが正義！

これが私の望んでいた姿！

これまでの努力は！今！この時のために！

皆が笑顔で過ごせるために！

メギドフレイムを切り裂く右足は徐々に消滅していく…

壮絶な痛みと共に、これまでの記憶が脳内を駆け巡る。

幼年期の頃に仲間たちと街中を走り回った記憶。

成長期の頃に究極体への進化を夢見てトレーニングをした思い出。

成熟期へ進化した際の絶望。

完全体になった後もコツコツと究極体を目指し、研鑽を重ねた日々。

昔の私が今の状況を知れば、どう思うだろうか。

憧れたヒーローらしい姿に歓喜の声を上げるだろうか…

命と引換えに戦う姿に恐怖するだろうか…

もう右足は無い。

メギドフレイムは裂き切った。

あとは残りの全エネルギーを奴にぶつけるだけだ。

驚愕の表情をしたメギドドラモンの胴体のハザードマークへ向け、エネルギーの塊となった私の身体は高速で進み続ける。

この戦いの終結後、街はどうなるだろうか。

願わくば…復興し再度、繁栄してくれることを願う。

そして、街の皆に、これから産まれてくる者たちに、私の生き様を語り継いでほしい。挫折しても諦めず、目指す未来に向け努力を怠らなければ、必ず夢は叶うということを。

私が…私の生涯が…

全てのデジモンの希望となる事…それが今の私の夢だ。

2 完全体デジモンは夢を見た

『『『アサダヨー オキテー』』』』

毎朝のように、幼年期デジモンたちの1日の始まりを告げる声が聞こえる。

「元気ナノは イイ事だね…」

まだ布団の中に籠りたい気持ちを抑え、ゆっくりとベッドから降りる。

「まだ、アンな夢ヲ見ルンだね。ボクは…」

成長期だったエレキモンの頃に思い描いた理想の姿。

もう半ば諦めている理想の姿になった夢の内容を思い返し、まだ諦めきれしていない自分の本心に気づき、苦笑する。

固まったオイルを纏う蛇腹状の腕と四つ足を回す。

ギシギシと音を立て、そろそろ全身メンテナンスに行く必要を感じる。

そこそこの年齢になってしまったので、昨日の疲れがあまり取れていないのもあるだろうが…

体調の確認をしながら、ゆっくりとキッチンの方へ進む。

「アチャあ…コレしかナカッタか…」

起き抜けのモーニングコーヒーを優雅に嗜む…。

毎朝の楽しみなのだが、今日はそうもいかない。

お気に入りの買い置きが切れたことを、すっかり忘れてしまっていた。

「ヌメヌメ印カ…ドブ臭インダヨな…」

私の好みはアンドロ印。

オイルの風味が際立つマシーン型・サイボーグ型デジモンに人気のコーヒーだ。

一方、手元にあるヌメヌメ印は汚物系デジモンに人気の商品だ。

特売で安かった上に、スカモンから進化した自分なら意外とイケるのでは？と考え購入したのだが…。

特売には特売なりの意味があるという事を思い知り、棚の奥にしまい込んでいた。

捨てればいいものを取って置くという所がなんともみみつきく、私らしい。

コーヒーを飲まないという選択肢もあるが、理想に満ちた夢から現実に引き戻すには持つてこいかもしれない。

デジモンは成長する。

日頃の生活の中で様々なことを学び、トレーニングやバトルで戦闘力を高め、周囲の環境の影響を受けつつ、自身の限界に達した後にふとした切欠で進化する。

エレキモンだった頃は特に悪い事もせず、際立ってトレーニングをサボっていたつもりはない。

より強く、より知的に、等と他者よりも先へ行こうとする程、修練に励んではいなかったが…。

それでも身の丈に合う程度には頑張っていたつもりだ。

いざ進化の時を迎えてみると、全身黄色で、足の無いとぐろを巻いた柔らかな塊になっていた。

怠惰で不衛生なデジモンの進化先の筆頭であるスカモン。

まさか自分になるなどと欠片も考えておらず、ショックで3日は寝込んだ。

友人達からは慰めの声と憐みの目。

ご近所のデジモンからは下水区画への転居を勧められた。

スカモンなどの汚物系デジモンは、何をせずとも臭う特性を持つ。

理解はされても、二十四時間ずっと隣の家が臭いのは許容できないだろう。

マシン型ならオイル臭が、獣型や爬虫類型などは獣臭がする。

なので、ある程度の臭いには寛容ではあるのだが、汚物臭は流石に耐えられない。

特にスカモンは存在自体がウ●チと同じだ。

丁寧に体を洗ったところで、石鹼の匂いが混じった汚物になるだけだ。

進化による体の変化には町民全体で対応している。

腕が大砲になり文字が書け無くなれば代筆するし、足が短くなり階段昇降が出来なくなったら持ち上げて運んであげるなど、みなで助け合い、生きている。

しかし、存在するだけで臭ってしまうのであれば対策が立てられない。たえず鼻を摘まむわけにもいかないし、コチラとしても申し訳なさすぎる。

汚物デジモンへ下水道画を勧めるのはそういった理由と、もう一点。

デジモンによっては住環境が、体調や進化先々に大きく影響を与える。

メラモンのように全身が炎のデジモンは水の中に住めないし、ユキダルモンのように全身が雪のデジモンは熱い地域に住むことは出来ない。

そしてスカモンは特性上、下水道画が最も過ごしやすい環境であり、むしろ清潔な場所では病気になりやすい。

そうして下水道画に居住すれば、完全体への進化先も汚物系となる可能性が非常に高くなってしまふ。

先達のスカモンやヌメモン達には申し訳ないとは思いますが、私は御免だった。

ポカポカと暖かい太陽の光を感じ、友人たちと共に研鑽し、究極体を夢見て過ごす時間を手放したく無かった。

転居を勧めてくれたガルルモンは特に鼻が利く獣型デジモンだった。

彼が成長期のガブモンの頃から仲が良く、私の身を案じての事でもあると理解していたが、やんわりと拒否した。あの時期は大層迷惑をかけたと思う。

なので、周囲の理解を得るために精力的に町内会のドブさらいや共用トイレ掃除など、皆が嫌がる仕事を率先して行っていた。

それまで通りの生活をしていたら、汚物臭をまき散らす嫌がらせ行為と認定され、町長権限で強制転居になる事もあり得ただろう。

しかしまあ、辛かった。

ウンチを見れば自然に涎が出る。

ウンチの臭いが高級フルーツの芳醇な香りのように感じる。

誰かがトイレに入ろうとするのを目で追ってしまふ。

トイレを流す音を聞いて残念な気持ちになる。

頭では分かっているのに、理性が本能に負けてしまふ。

もちろん、肉やキノコ等の普通の食事もある。

しかし、体質に合わない。

美味しく感じない。その上すぐにお腹が空いてしまう。

エネルギー効率が悪いのだ。

最悪なのは、普通の食事なら規定量の配給が受けられるし、それ以上に必要なら購入が可能なのだが、ウンチにはそれがない。

仕方なしに清掃活動の際に回収した汚物を食べたり、トイレに間に合わなかったデジモン達のウンチを食べたりしていた。

そうして食べるウンチの味は美味しかった。

自然に涙が出てしまう。

この世の何よりも美味しいものと味覚は告げる。

この世の何よりも汚く、悲しい行為だど心は告げる。

姿・形は変わっても、心が変わる訳ではない。

ふとした時に、嫌悪感から全てを吐いてしまう。

自身の吐しゃ物を見て涎が出る。

何度も 死のうと思った。

何度も もっと頑張れば良かったと思った。

何度も 何度も 何度も…

そんな日々を送っている内に、だんだんと嫌悪感が薄れてゆく。いつの間にかウンチを食べても、一切吐かなくなっていた。

私は、誰が何処から見ても立派なスカモンとなっていた。

どぶ臭いコーヒーを飲みながら、そんな昔を振り返る。

スカモン時代の名残か、この程度の臭いなら頑張れば飲めてしまう…。

頑張っただけで飲むのが嗜好品かは、さておき。

いつかはこのどぶ臭いコーヒーも完全に飲めなくなる日が来るのだろうか。早くそうならしてもらいたいものだ。

「コーヒーを飲み終えた私は、寝ている間に体の隙間から漏れ出たオイルを洗い流し、関節部にグリスを充填し馴染ませる。

次に、金属磨きクロスで全身を軽く拭き、身だしなみを整える。

「うん。バッチリだね。」

姿見に映る私は、光り輝くスクラップ。

完全体 マシン型デジモンのナノモン。

体がボロなのは仕方ない。

せめてもの出来る限りの努力は怠らない。

いつか究極体に進化する日が来るかもしれない。

その時に備え、普段の何気ない事にも気を使い、より良い生活を志す。スカモンの時のような思いをしないうために。

いつか来るかもしれない、その日を夢に見て。

3 ジジモンは夢を語る

外出の準備を整えたので、足早に町の広場へ向かう。
毎朝この街の広場では、町長主導の下でラジオ体操が行われる。

健やかな肉体には健やかな心が宿る。

同じ町に住む仲間として一体感を獲得できる。

この謳い文句で開始した町長肝いりの施策である。

現在の町長は、私がスカモンに進化してから就任した。

非常に理解できる考え方であり、スカモンから脱却するためには好都合であった。

当時から積極的に参加をしているが、残念なことに他のデジモン達の参加率は著しく低い。

理由としては、住民の中には夜行性のデジモンもあり、そういった事は一つも考慮されていないことが大きい。

また、起きているから参加するわけでも無く、それぞれの目指す先の進化に不必要と判断することもあるし、町長が好きではないから参加しない者もいる。

それでも継続は力なり。というかの如く徐々に参加者は増えてきている。

トレーニングの準備運動代わりに、町民間でのコミュニケーションの場として機能し始めている。

…たまに、参加率が非常に良くない時期があるが。

広場につくと幼年期や成長期デジモンたちがたくさんいる。

幼年期デジモン達は、体操というより遊びに来ている。

小さく白い饅頭のようなちびっ子達が、ピョンピョン楽しそうに跳ねている。

より格好良く、より強く進化した成長期デジモン達は真剣なまなざしだ。

体操程度で大きく結果が変わることもないと思うが…

おそらく、体操でグレイモンやエンジェモンに成る事も出来るだなどと吹聴したのだらう。

それじゃあ何であなたはジジモンに進化したんですかね？

などと聞こうものなら、町長権限で配給カットなど言い出すものだから、苦言を呈するデジモンもいなくなってしまった。

以前にジジモン自身から、完全体時代はミステイモンだったと聞いた。

それが事実で、その時も体操をしていたというのであれば、実体験を元にした施策だし、一応の信用は出来るだろう。

事実かどうかの確認を取る方法は無いが。

パラパラと成熟期や完全体の他のデジモン達も集まり、定刻となった。

「よおし。それじゃあ両手を横に広げて、ぶつからない距離を保つんじゃあ！」

ジジモンがいつもの通り全員に告げ、体操の音楽を流し始める。

先ほどと変わらず楽しそうに飛び跳ねる幼年期たち。

しっかりとメリハリのある体操をする成長期たち。

とりあえずコレくらいで良いだろうという感じの成熟期、完全体たち
見慣れたいつもの光景の中で、成長期と成熟期の間位の塩梅で体操する私。

数分間の体操の時間が終わり、一人ずつジジモンの元へ向かう。

参加者は終了後に参加カードにスタンプを押してもらおう。

そうして貯まったスタンプは十個につき肉を一つ交換できる。

成長期で一日に必要な肉は三から五個、成熟期ともなれば一日十五個も食べる者もいる。何もないよりはマシだが、完全に雀の涙という言葉が当てはまる。

まあただ、景品を豪華にすれば参加者が増え、用意しきれなくなる可能性もあるだろうから、オマケ程度になってしまうのは仕方がない。

それは皆分かっているのだが、どうしても裏では不満の声が出てしまう。

「それじゃ、今日はコレで終わりじゃが、みなに大事な知らせがあるんじゃ」

私や成熟期、完全体デジモン達は一様に嫌な顔をする。
ジジモンの知らせで良い話だったことがほとんどない。

大体が新たな施策を行う報告で、町民たちの意図をあまりくみ取らない。
もしくは、ジジモンの好みのデジモンの意図のみを組むなど、非常に独善的な施策の報告なのだ。

過去には、毎月必ず自分の施策の良かったところを報告しろと言ったり、自分が拾ってきた毒キノコに当たり、街の中で栽培されているキノコの配給・販売を禁止だと言ったり、思いつきや八つ当たりな施策ばかりお開始宣言を行っている。

内容があまりにも酷い時は各所から集団で抗議・批判がでるが、ジジモンが正しい行為と思ひ込んでるので取り付く島もない。

キノコの件については、八つ当たり過ぎると自分でも理解していたらしく、すぐに撤回していた。

さて：どんな施策なのかと、嫌々耳を傾ける。

「皆も知つての通り、この街の町長は世界全体を維持・管理するイグドラシル様の指示にて任命されておる！

町長に与えられた責務は街の繁栄と、優秀なデジモンの育成じゃ！

つまり、ワシはその責務を果たす事の出来る、選ばれし優秀な究極体という事は周知の通りじゃと思う！

しかし、ワシが就任して十年：イグドラシル様の元で働くに値するデジモンへ進化する者がおらん！

これは、一重にこの街の長であるワシ、ジジモンの責任であると同時に、個々の努力が不足していることが原因なのじゃ！

なので、大規模な改革を行い、現状の改善を行い事とする！

これから伝える内容は後ほど、この広場に掲示するが重要なことなので、よおしく聞くのじゃー！」

広場のあちらこちらから戸惑いの声が上がると、嫌な予感しかしない。

「怖がることは無いんじゃ。」

内容としては、トレーニング施設の利用方法の変更じゃ。

これまで通り空いていれば利用は可能じゃし、基本は予約制なのも変更はせん。

変更するのは利用者によって優先度合いを変える。という事じゃ。

例えばイグドラシル様の直属にいらっしゃるロイヤルナイトたち聖騎士型デジモンや聖なる力を持つ天使型デジモンなどに連なる、クダモンやパタモン達に予約の優先権を与えるのじゃ。

これまでは先着順じゃったが、同じ時間帯を希望した場合に優先権の無いデジモンは強制キャンセルになるという事じゃ。

優先権を持つデジモン同士で同じ時間帯になった場合は、これまで通り先着順じゃ。

これで、将来有望なデジモンの可能性が広がり、ワシの責務も果たせるというものじゃ！
そうして、いつの日かイグドラシル様をお守りするデジモン達が全てこの街出身のデジモン達になる…それがワシの夢なんじゃ！」

静まり返った広場。

私もそうだが、他のデジモン達も理解できない者を見る目でジジモンの事を見ている。

名前の挙がったクダモンやパタモン、自身も含まれる可能性の高いグレイモンなどの中には期待の眼差しで喜んでいそうな者もいるようだが、周囲の目も有るので流石に態度に出し過ぎないようにしている。

この施策の問題点は簡単だ。

現時点で確実に優先権を与えられないデジモンを無視している。優先権を持っても、進化した先で優先権が無くなり、返り咲くチャンスが無い。

あまりにも我々を馬鹿にした施策に、だんだんと怒りの声が上がりが始めたところで、ジジモンが再び口を開いた。

「…もちろん、優先権の無いデジモン達からしたら不満はあるじゃろう…。」

これで良い結果が出れば、この街への期待度が高まるからの。

イグドラシル様の元より、ロイヤルナイツが教官とし来る可能性や、追加で新規の各種施設が出来る可能性だってあるのじゃ。

それにワシは優先権の無いデジモンにトレーニングするなどは言っておらん。

この街のトレーニング施設は1か所のみで、今でも足りておらん状況じゃ。そして古いトレーニンング機器は有るし、まだまだ空き地も有るじゃろ。

空き地に古い機器を置き、そちらはコレまで通り先着順とするのじゃ。

：修理にメンテナンス、空き地の整備とやることは多いが、そこについてはワシの就任前から、やろうと思えば何時でも出来る事を放置していたお主らにも責任は有るからの。

使えるようになるまで時間はかかるじゃろうが。機械知識の習得や、空き地整備の体力仕事でトレーニング代わりになるし、問題ないじゃろう。

重要なのは将来を見据え、どのように動くかじゃ！そのナノモンを見てみる！ワシが来たときはスカモンじゃったぞ。

何度も下水に送ってやろうと思つたが、見事に汚物系から脱却したではないかの。スクラップではあるが…。

という事で…今日のところは解散じゃ！」

言いたい事を言った、ジジモンが走って逃げていく。

怒り狂ったテイラノモンやガジモンなどが一斉に追いかけていく。

私も行って考えを改めるように言つてやりたいが、コレまでの事を考えれば改めることはしないだろう…、

それに、空き地に新規トレーニング施設を作るといふ事については賛成だ。現時点で利用希望者で溢れて、譲り合いや時短利用など問題を抱えている。

そして実は、ナノモンに成ってから機械修理の技術習得がしやすくなり、古い機器については時間を見つけては少しずつ修理していたのだ。ジジモンがそれに気付くようなデジモンとは思わないが、正直一人では手が回らないし、設置場所の確保や移動など後回しだったので、利用させて貰うとしよう。

ジジモンと似た考えだったのは氣にくわないし、優先権はかなり街の状況を悪化させてしまうだろう…。

デジモン間での格差が今後どれ程の影響を与えるのか…。不安を覚えながら帰路に就くのであった。

3 ガルルモンは夢から覚める

帰宅してすぐに呼び鈴がなる。扉を開けると、目を輝かせた隣人のガルルモンがそこにいた。

おそらく先のジジモンの話を聞きつけたのだろう。ロイヤルナイツのオメガモンへ進化できる可能性のあるメタルガルルモンに連なる彼にとっては、これ以上ない朗報だ。

その上、なかなかタイミングが悪く施設の予約が上手く取れなかった結果、私と同年齢であるが十分なトレーニングが出来ておらず、完全に進化できていないのだから、さも
ありなん。

「ナノモン！今日も体操に行ってたんだろ？」

ジジモンが言ってたって話は本当なのか？」

本当だと伝えると素早く、大きく、彼の尻尾が左右に振られる。

大量のホコリが舞い、尻尾が当たった先の棚やらがどんどん倒れていく…。

君は四足歩行だから、細かい片付け出来ないだろう…勘弁してくれ…。

「あ、すまないナノモン…。今度から気を付けるよ…。

しかしコレでようやく俺にも進化のチャンスがきたと思うと嬉しくてな…。」

反省したのか、だらんと下がった尻尾がなんとも切ない気持ちにさせる。

「ナノモンや他のデジモン達にとっては気にくわない話だろうけどさ。隣でお前を見てた俺からすれば機会とやる気さえあれば、どうにか出来るんだって思わされたんだから、嬉しくて仕方なかったんだよ…。」

知っている。

私がかスカモンだった時に、なんだかんだ臭いを我慢し、友人を続けてくれたガルルモン。転居を勧めてきた時だって、泣きながら臭いの事と私の体調の事を気遣って、腹を割っ

て話してくれた。

私がナノモンに進化した時、一番喜んでくれた友人。

私がナノモンに進化してから暫く経っても、自身が進化できない事を悩み、泣いている事を私は知っている。

「だからさ、お前がやってた古いトレーニング機器の修理は、足しかない俺には手伝えなかつたけど、移動とかなら俺にも出来るからさ！何でも言ってくれよ！

空き地に置いて良いってなつたんだろう！他のデジモン達にも声をかけるからさ！

設置場所が無いからどうしようかと思つてたんだよ！」

驚いた。

修理の件なんて、誰にも話していなかつたのに。

感謝の気持ちを彼に伝えた上で、彼に注意をしておくことにする。

「ありがとう…。ソレじゃオ言葉に甘エさせテ貰うヨ。

しかし、私はイイとしても他のデジモン達は優先権にカナリ怒つてルだロウし、余所でハ態度にサナイ方が良さそウだよ。」

先ほどまで荒ぶっていた尻尾を指さしながら伝える。

「わかつてるよ。この話を伝えてくれたハックモンにも同じような事を言われたよ。

俺なんかは、しばらく必要以上に外に出ない方が良さそうだったな。

優先権を貰えなさそうなデジモン達は、もうかなりピリピリしてるみたいだからな。余計な喧嘩は御免だよ。」

流石に理解しているようで安心した。

しかし、この状況では古い機器に皆の目が向いてしまうので修理に行くことも出来ない。この施策に反感を持つデジモンに見つかればどうなる事か…。彼からの好意は有り難いが、この状況で手伝ってくれるデジモンも見つかりそうにないし、なかなか難しくなつてしまった。

そんな事を話しながらガルルモンの方を見ると、ハツとした顔をして露骨に視線を外さ

れた。

…これは…もう何かやったネ…。

おずおずと、申し訳なさそうにガルルモンが話し出す。

「実は…お前も昔は来てたけど、俺と同じように進化出来なくて燻ってる成熟期の奴らで定期的に集まって話してる会合でさ…。

昨日、そこで修理の件は話しちゃったんだよ…。お前の力になりたくてさ…。

そんな時は皆喜んでただけど、こじらせてる奴らも多いだろ…？。

もしかすると…ジジモンの指示でお前が修理してたとか思われてるかも…。」

なんてことだ…。

あのコミュニケーションの連中はマズい。

大半は良い奴らなのだが、進化出来ない事を他のデジモンの所為にする奴らも多い。

私がナノモンに進化した時だって、口ではおめでとうと言いなながらも目つきは完全に嫉妬で溢れていた。

しばらくの間、玄関前に汚物が落ちていたが、恐らくあいつ等だろう…。

その程度の嫌がらせで済むなら大した事は無いが、今回の施策では下手をすると暴れ回る可能性だってある…。

そんな奴らだから、優先権が与えられるであろうガルルモンも危険だ。

話しながらそれに気づいたのか、ガルルモンは先ほどまでの嬉々とした表情から一転して恐怖の色に変わっていく。

この状況で我々二人でいけば、ジジモンの指示で何かを画策しているようにも思われるだろうが、一人でいることの方が危険だと判断し、ひとまず今日はガルルモンと二人でこの家で過ごすことにした。

4 デュークモンは夢を破壊する

ジジモンの施策は発表から一夜明け、私の家の前には過去に無い程の量のウンチが置いてあった。

この程度で済んだなら、まあいいか。

正直に言えば殴り込み位の事は有ると思っていたので、ホッとした。ウンチを見て安心するとは昔を思い出して嫌ではあるが。

家の中にまで強烈な汚物臭がするので、ガルルモンと共に清掃を始める。

鼻の利く彼に手伝わせるのは心苦しいが、この量をで一人片づけるのは無理がある…。

悪臭に涙を流しながら、汚物を運ぶガルルモンの姿を見て、マシーン型の自分は嗅覚が無いので一層の罪悪感を持つてしまう。

そうしていると広場の方向からハックモンが血相を変えて走ってくるのが見えた。

「おい！大変だ！早く広場の方に来い！ロイヤルナイツだ！イグドラシル様の部下のデュークモンが来るらしいぞ！」

昨日の今日で更に事件だ…。

タイミング的に昨日の施策についてか…？

まさかジジモンめ。自分の評価を上げて施策を成功させるために事前に手を打っていたな…？

清掃を切り上げ、モーニングコーヒーを諦め広場へ向かうことにする。どうせコーヒーもウンチ味だ。

今日はもう汚物に関わりたくはない…。

広場に着くと、もう街中のデジモン達は大半が集まっていた。

ニヤニヤこちらを見ているダークティラノモンやザッソーモンの姿を見て、彼らが一晚

中ウンチを我が家の前に置く姿を想像する。

嫌がらせをするのも一苦労だね…。

複数のナイトモンを護衛に付けたジジモンが前に出る。

ナイトモン達はうんざりという顔でジジモンの方を見ている。聞こえてくる周りの話し声から察するに、昨日からジジモンを守って散々な目に合ったようだ…。

「みな集まったな！それではコレからデュークモン殿からお話がある！粗相のないように！しっかりと聞くのじゃ！」

ジジモンの言葉が終わると同時に空から白銀の鎧を纏った聖騎士が降り立った。

右手には貫けぬ物は何もないと思わされるほど鋭利なスピア

左手には何物をも防ぎきれそうな巨大な盾

胸に配置されたハザードマーク

凛々しく雄々しい輝く白銀の鎧の中に、全てを飲み込むかのような紫の装飾をされた鎧姿の聖騎士の姿に歓声上がる。

ロイヤルナイトを見る事など一生に一度あるかわからない。

皆の憧れる究極体デジモンがそこに現れたのだ。

「私はデュークモン。イグドラシル様の元、このデジタルワールドを守る聖騎士の一人。皆には急に集まってもらい申し訳ない。この度のジジモンの育成計画について、イグドラシル様の意向を皆に伝えさせてもらう。」

「この度の育成計画について、イグドラシル様はその全てを評価されている。

優秀なデジモンの増加は、デジタルワールドの維持・統治に置いて必要不可欠である。

この度の施策に異論・反論が有る者はデジタルワールドに平和を脅かす物で有ることを十分に理解せよ。」

「万が一、少しでも反旗を翻したと判断すれば、このデュークモンが成敗する！」

右手のスピアをダークテイラノモン達の方へ向けながら、そう宣言した。
今朝の件を把握しているのか、それとも同じ考えの奴らで固まっていたからなのか、あれでは名指しで釘を刺しているのと同じだ。

グレイモンやエンジェモン達が彼にう冷たい視線を向けている。
彼らが今朝やった事は非難される事だろうが、凶悪犯のような物言いをされるほどではないのだから、かなりやり過ぎに思う。

しかし、果たしてこの施策に本当に効果があるか確定していない状況で、ここまで大々的にイグドラシルの権威を振りかざすことに違和感を覚える…。

失敗すればジジモンのせい。成功すればイグドラシルのおかげとなるから？

イグドラシルとは、そこまで矮小な存在なのか？

御上のご意向など私にはあずかり知らぬが、そのようなものなのか？

ペシペシ

ペシペシ

毛の塊が私を何度も包む。

昨日の不安が解消されたガルルモンが全力で尻尾を振っている。

左に尻尾が来る度に私の身体がガルルモンの尻尾で隠れる。

ほっとした友人の姿に嬉しい反面、どうにかして欲しい…。

「おかしい…あれはデュークモンなのか…？」

横に立つハックモンがつぶやく。

どういうことだ？デュークモンを見たことが有るのか…？

「ああ…いや…有るには有るんだが…しかし…」

狼狽したハックモンの姿に戸惑っていると、目の前に紫の閃光が走った。

次の瞬間、ハックモンが居たところには大きな穴が空いていた。

周囲を見渡すと広場の後方に赤いマントを身にまとった両手が剣となったデジモンが一体立っていた。

あの姿は…ロイヤルナイトのジエスモン？

状況的に考えればハックモンが進化したという事か？

「貴様…カオスデュークモンか…？イグドラシル様を語り何をしようというのだ！」

ジエスモンは右の剣をデュークモンに向けそう告げる。

「ジエスモンよ。何を言っている？私はイグドラシル様の忠実な部下。デュークモンである。逆らうのなら同じロイヤルナイトといえど容赦はせんぞ？」

「ジジモン、この街の皆よ騙されるな！奴はカオスデュークモン！ロイヤルナイトなどではない！」

「そして、私はロイヤルナイトのジエスモンで有り、この街に住むハックモンだ！デジタルワールドの平和を守り、近くで見守るため！成長期の姿でこの街の住民となっていた！」

「カオスデュークモンは凶悪な邪竜型デジモン、メギドラモンのもう一つの姿だ！その存在はデュークモンと対をなす存在！信じてはならない！」

急な展開に全てのデジモンが混乱している。

ジジモンなどは最たるもので、自身が内通していたのがロイヤルナイトではないと告げられたのだ。信じたくはないだろう。

このままではまずい。確実にこのまま戦闘になるだろう。

今この場には、街のデジモン全員が集まっている。究極体同士の戦闘が始まれば被害がどれ程の物になるか想像したくもない。

となれば、私がすることは一つ。

「みんな！聞こエタだろウ！私タチの仲間ハックモンは嘘ヲつくヨウな男じゃない事を知ってイルだろウ！早く！ココカラ離れるンダ！」

私の言葉に意を決したように逃げ始めるデジモン達。

それでも、中には半信半疑で動けないデジモンや、状況を理解できない幼年期デジモン達がどうすれば良いかわからず、立ち尽くしている。

「おい！私の言葉を信じなクテもいい！今ココで戦闘が始まるんだ！早く！ちびタチを連れて逃げるンダ！」

ようやく状況を理解したデジモン達が逃げ始める。幼年期を連れて行かないデジモン達もいるが、幼年期達の中でも賢い子が他の子を利用して逃げ始めている。

とりあえずコレでいいか…。

コレでこの場には私とジェスモン、ガルルモン、カオスデュークモンに茫然自失のジジモンと取り巻きのナイトモン達だけだ。

「ナノモン、ガルルモン。君たちも逃げるんだ。ナイトモン達はジジモンを連れて離れてくれ。」

そうしたいのは山々だが、昨日の見た夢で戦ったメギドラモンが目の間にいる。

そんな事がそうそう起こるものではないだろう。

きつと、これが私の人生の分水嶺。

阿呆な事だとも思うが、私が夢見た正義の戦士ジャステイモンはココで引くことは無い。もし、ココで逃げてしまえば私は一生ジャステイモンにはなれないだろう。

そう確信できる。

スカモンからナノモンに進化したとき、私は理解した。

進化とは、自身の心に、精神に呼応する。

だから、逃げない。

「メギドフレイム」

メギドラモンから放たれた業火のブレスが私の身体を包み消し去った。

ガルルモンの目の前でナノモンが焼き消された。自分が考えていた以上の友人の信念の強さに、呆気にとられている内に、その友人を目の間で失った。

「ガルルモン！君だけでも逃げろ！早く！」

ジェスモンの叫びは聞こえているが、脚が動かない。

「メギドフレイム」

メギドラモンの業火がガルルモンにも向けられる。

いまだにショックから抜け出せないガルルモンは動けない。

広場の後方からジェスモンが駆け出すが、およそ間に合う距離ではない。

「駄目だ！ガルルモン！君までいなくなるな！」

ジェスモンの叫びが響く中、ガルルモンが居た場所にメギドフレイムが包み込む。ようやくたどり着いた時には、もうそこにガルルモンはいなかった。

「なぜ…どうしてだ…？どうして貴様が生きている？」

メギドフレイムの着弾地点より右側にガルルモンが倒れている。

そしてその横には、黄色く、トグロを巻いたウンチ。スカモンが立っていた。

「間一髪だったよ…たまたま僕の足元に排水口があったからね。

メギドフレイムが当たる瞬間に下に潜ったのさ。

それでもダメージは受けた上、排水に入ったショックで退化しちゃったみたいだね。死ななかつたのは日頃のトレーニングのおかげだね。きつと。」

いくら鍛えていたとはいえ自分でも死ななかつたのが不思議なほどのダメージだったのだが、スカモンへ退化したことにより排水の中で回復が出来たのだろう。

スカモンであった事に感謝する日が来るとは思わなかったが、

「さあジェスモン。ともに戦おう。僕は逃げないよ。例えココで死んだとしても、逃げてしまえば死んだのと一緒だ。絶対に。逃げない。」

そう友人へ宣言するも、身体のアチコチは痛いし、気を保っているので精一杯、本音ではもちろん逃げ出したい。

しかし、ここで諦めてしまえば、私は二度と私で居ることは出来ない。

「力無き言葉に何の意味も無い！これで終わりだあ！」

メギドラモンから溢れ出る程のエネルギーが口内に収束していく…あれを防ぐことが出来るとは思わない。しかしやらなければならない。

「メギドフレイム！」

あらゆる全ての物体が灰塵に帰す、メギドラモンの必殺技。避けることは出来ない。

逃げることは出来ない。

防御など今の状態では何の意味もない。

…となれば、やることは一つ！

「体はどうなってもいい…この一瞬だけ…全てを…この一撃にかけるっ！」

己の命を力に変え、走り、飛び上がる。

『えんがちよ！ きいいいいいいいつつつつつ！』

スカモンに足は無い。体当たりだ。

そんな事はどうでもいい。

これがスカモン！

これが私の望んでいた姿！

これまでの努力は！今！この時のために！
皆が笑顔で過ごせるために！

メギドフレイムを切り裂く体は徐々に消滅していく…

壮絶な痛みと共に、まさかスカモンの私が命をかければ、メギドフレイムに対抗できる
とはと、いやに冷静な考えと共に、走馬灯が脳内を駆け巡る。

幼年期の頃に仲間たちと街中を走り回った記憶。

成長期の頃に究極体への進化を夢見てトレーニングをした思い出。

成熟期へ進化した際の絶望。

完全体になった後もコツコツと究極体を目指し、研鑽を重ねた日々。

昔の私が今の状況を知れば、どう思うだろうか。

憧れたヒーローらしい容姿ではないことに衝撃を受けるだろうか…
命と引換えに戦う姿に恐怖するだろうか…

メギドフレイムは裂き切った。

意外と体は丈夫で消失していない。

あとは残りの全エネルギーを奴にぶつけるだけだ。

驚愕の表情をしたメギドドラモンの胴体のハザードマークへ向け、エネルギーの塊となつた私の身体は高速で進み続ける。

この戦いの終結後、街はどうなるだろうか。

願わくば…復興し再度、繁栄してくれることを願う。

序列など付けなくとも、勇敢に、強く、気高く生きれば夢は叶うと知ってほしい。

街の皆に、これから産まれてくる者たちに、私の生き様を語り継いでほしい。

挫折しても諦めず、目指す未来に向け努力を怠らなければ、必ず夢は叶うということ。

もう、ジャステイモンになれなくてもいい。

私が…私の生涯が…

全てのデジモンの希望となる事…それが今の私の夢だ。

あれから数年の月日が過ぎた。

黄金の装甲を纏ったクーレスガルルモンは広場の中心に立っている。

あの日、クーレスガルルモンは何もできなかった。

ただソコに居ただけ。

友人の命がけの戦いを見届ける事しかできなかった。

メギドラモンはスカモンに敗れた。

奴の目的はジジモンを利用して自身の手駒を増やしたかったらしい。

後からジェスモンから聞いた話では、奴も昔はデュークモンを目指していたらしいが、成熟期でデビドラモンに進化した時から絶望し、その絶望をロイヤルナイツやイグドラシルに責任転嫁し、世界の仕組みを変えようとしていたのだという。

その割にお粗末なやり口だとも思ったが、善き指導者に出会えなかった事で賢さが足りていなかったそうだ。

なのでメギドラモンは現在、ロイヤルナイツ管理の元で退化し更生施設に入っている。

新たに幼年期からやり直し、いつかこの街に戻ってくる予定だ。

その時のためにも、クーレスガルルモンは、街に出来た複数の訓練所をまとめあげ教官として後進の育成に努めている。

スカモンが少しずつ修理した機器は、皆で引き継ぎ修復し利用している。

彼の思いは確実に受け継いでいく。

友人のを見せてくれたデジモンの可能性を先の未来永劫必ず残し、メギドラモンのような存在を生み出さないように。

町はずれの下水区画の方に顔を向ける。

あそこにも様々なデジモン達が居る。

来年には下水区画にも汚物型デジモン向けの訓練施設が出来上がる。

そして近隣のジャングルに、火山に、海に、各地域に適した訓練所を随時設置していく。

「スカモンの思いは私が…街の皆が必ず受け継いでいくよ…」

下水区画の奥深く、私はいつもの通りモーニングコーヒーを嗜む。

「ヌメヌメ印はいいね…身体に染み渡る…」

私が負ったダメージは大きかった。本来であれば死ぬほどのものだ。

幸いなことに、あの戦いでスカモンの身体が排水で回復することが分かった。だから、私はココに居る。

ここから出ることは一生出来ない。

今、私の身体は汚物で絶えず回復している状態だ。

もう、ジャステイモンに進化するこ夢は叶わない。

ナノモンへ進化することもない。

それでいい。

私が夢見た思いは、友人達が受け継いでくれた。

私はスカモンだ。

見た目はウンチの汚物系デジモンだ。

私は夢を見る。

いつまでも、モーニングコーヒーを楽しめるだけの平和な世界で生きていくことを。